

## ごみ減量行動の日独比較:規範・ネットワークの影響

○安藤香織(Ando Kaori)<sup>1</sup> ・大沼 進(Ohnuma Susumu)<sup>2</sup> ・広瀬 幸雄(Hirose Yukio)<sup>3</sup> ・  
杉浦淳吉 (Junkichi Sugiura)<sup>4</sup> ・Ellen Matthies<sup>5</sup> ・ Anke Bloebaum<sup>5</sup>

(<sup>1</sup>奈良女子大学生生活環境学部 <sup>2</sup>北海道大学文学研究科 <sup>3</sup>名古屋大学環境学研究所  
<sup>4</sup>愛知教育大学教育学部 <sup>5</sup>Ruhr University Bochum)

キーワード：ごみ減量行動、日独比較、規範、ネットワーク

### 問題

筆者らは、これまでに日独の大学生を対象として環境配慮行動の規定因に関する調査を行ってきた(安藤・大沼・Bloebaum・Matthies, 2002)。本研究では、より代表的なサンプルとして、一般市民を対象とした社会調査を行った。予備調査により認知・行動で様々な違いが見られることが明らかになったが、これらの違いがどのようにして生じるのか、今回は特に規範、ネットワークの影響に焦点を当てた分析を行う。

規範の影響に関して、これまで文化研究では日本は他者との関係が重要であることが指摘されてきた(e.g. Markus & Kitayama, 1991)。Ando, Abrams & Hinkles (1998)では、日本では主観的規範が退職意図に影響を及ぼしていることが確認された。日本では、自分自身の価値と比較して、相対的に他者からの影響が強いと予想される。

一方、ドイツに関して、これまでヨーロッパで行われた研究では、自分の価値観に基づいて行動すべきとする個人的規範が中心的概念として環境配慮行動を説明できることが示されている。

そこで、本研究では以下の仮説を検証した。

- 1 日本では、主観的規範(重要な他者からの期待)がごみ減量行動に影響を及ぼすだろう。
- 2 ドイツでは、個人的規範がごみ減量行動を説明する主要な変数となるだろう。

また、どのような他者から影響を受けやすいのかを分析するために、本研究では対人ネットワークについて、強い紐帯・弱い紐帯、及びそこに含まれる環境に関心のある友人数を調べるという方法で検討した。

### 方法

#### 対象者

ケルン市：ケルン市在住のドイツ国籍を持つ 3000

人を無作為抽出し、2003年10月に質問紙を郵送で配布した。回収数1014、有効回答数942であった(有効回収率31.4%)。

名古屋市：名古屋市選挙人名簿より1000人を無作為抽出し、2003年10月に質問紙を郵送で配布した。回収数536、有効回答数514であった(有効回収率51.4%)。

#### 質問紙

ごみ減量行動：「使い捨て商品を買わないようにする」についての実行度を尋ねた。以下、この単一項目を行動指標として用いる。

認知変数：行動意図、態度、主観的規範、個人的規範、行動統制感について尋ねた。態度のみ3項目でそれ以外は2項目で構成される。それぞれ1から5までの5点尺度で尋ねた。

ネットワーク変数：月に2,3回以上会う友人を強い紐帯、月に1回以下しか会わない友人を弱い紐帯とした。それぞれについて総数、環境に関心がある友人、環境に詳しい友人の数を尋ねた。

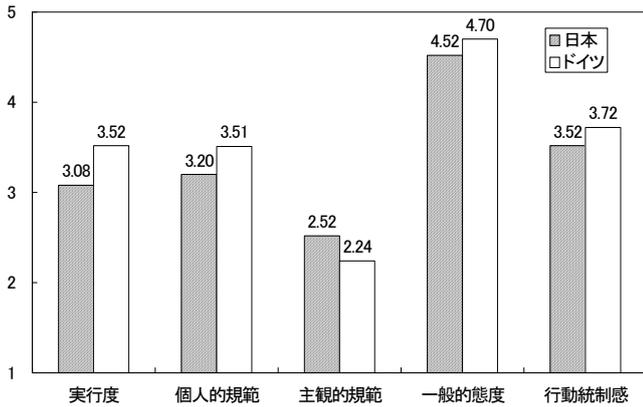
### 結果

#### 回答者の属性

日本では61%、ドイツでは52%が女性の回答者であった。年齢の平均値は日本47.3歳、ドイツ48.9歳であった。居住形態は日本では一戸建てが59%、ドイツでは24%であった。就業形態は日本では常勤の被雇用者が29%であり、ついで多いのが専業主婦/夫で22%であった。ドイツでは常勤が38%と最も多く、ついで多いのは定年退職者で25%であった。専業主婦/夫は7%のみであった。

#### 国別の平均値

主要な変数について、国別の平均値を図1に示す。実行度、個人的規範、一般的態度、行動統制感はドイツの方が有意に平均値が高かった。主観的規範は日本の方が有意に高かった。



ネットワーク変数

ネットワーク変数の平均値を以下に示す。全体的に総数、環境友人共にドイツの方がネットワークが大きかった。t検定の結果、すべて0.1%水準で有意であった。

表1 日独のネットワーク比較

		日本	ドイツ	t
月に2,3回以上会う友人	総数	.56(4.20)	.82(7.55)	-14.3***
	環境に関心ある人	.28(1.64)	.52(3.46)	-12.2***
	環境に詳しい人	.17(.85)	.38(2.42)	-11.7***
月に1回以下しか会わない友人	総数	.59(5.55)	.70(7.22)	-5.0***
	環境に関心ある人	.19(1.12)	.41(3.01)	-10.9***
	環境に詳しい人	.12(.65)	.30(1.88)	-10.2***

注：数値は対数変換後、括弧内は対数変換前の友人数を示す。

相関係数

認知変数、及びネットワーク変数間の関係について、相関係数を示す。環境に関心のある友人、環境に詳しい友人（対数変換後）の合成変数を環境ネットとして用いた。

個人的規範は、どちらの国でも実行度と中程度の相関が見られた。主観的規範との相関は日本の方が高かった。個人的規範と主観的規範の相関は日本の方が高かった。

強い環境ネット、弱い環境ネットはどちらの国でも実行度と弱い相関が見られた。

考察

仮説1に関しては、日本の方が主観的規範と実行度の結びつきが強いことが示された。個人的規範と実行度の関連は日独共にほとんど変わらず、仮説2は支持されなかった。ただし、個人的規範と主観的規範の相関は日本の方が高いことが示された。日本では、主観的規範が個人的規範に転化されている可能性があるのに対し、ドイツでは個人的規範は独立の要因であった。

ネットワークに関しては、強い紐帯・弱い紐帯、環境ネット共にドイツの方が友人数が多かった。これは、日米の比較においても、アメリカの方がすべての種類のネットワークで友人数が多かった調査結果（安藤・大沼・Chang・Lamb,2001）と一貫している。環境ネットと実行度の間には両国とも弱い相関が見られた。これらの変数については、今後重回帰分析などを用いて他の変数の影響を統制した上でさらに詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

Abrams, D., Ando, K. & Hinkle, S. (1998) Psychological attachment to the group: Cross-cultural differences in organizational identification and subjective norms as predictors of workers' turnover intentions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1027-1039.

安藤香織・大沼進・Edward C. Chang・Melissa N. Lamb (2001) ネットワーク・主観的規範が環境配慮行動に及ぼす影響：日米比較 日本社会心理学会

安藤香織・大沼進・Anke Bloebaum・Ellen Matthies (2002) 日独における環境配慮行動の認知 社会心理学会

Markus, H.R. & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

1本研究は文部科学省科学研究費より助成を受けた。

表2 国別の相関係数

	実行度	個人的規範	主観的規範	態度	行動統制感	強・環ネット	弱・環ネット	ドイツ
実行度		.50***	.26***	.25***	.48***	.23***	.19***	
個人的規範	.46***		.38***	.39***	.48***	.27***	.26***	
主観的規範	.42***	.66***		.16***	.27***	.26***	.18***	
一般的態度	.24***	.39***	.20***		.27***	.13***	.10**	
行動統制感	.39***	.51***	.39***	.31***		.21***	.15***	
強い環境ネット	.17***	.31***	.28***	.18***	.22***		.67***	
弱い環境ネット	.14**	.25***	.31***	.15**	.17***	.68***		

日本